

～新刊図書のご案内～

男女共同参画センターでは本の貸出を行っています。
お1人様2週間2冊まで。ご利用お待ちしております。

Z家族 データが示す「若者と親」の近すぎる関係

著者：博報堂生活総合研究所



Z世代は家族との密接な関係性が見られます。特に母親のメンター化が顕著で、社会進出を果たした母親が社会で実績を積み、ロールモデルや人生のアドバイザーとしての存在感が増しているようです。母親は子どもの安全基地としての役割を果たすようになりました。また同性の友人との結びつきが非常に強くなった分、恋人や異性との関係性は希薄になっています。彼らはSNSを通じてさまざまな価値観に触れて育ったことから、「こうあるべき」という固定観念に縛られません。自分らしい生き方や家庭生活とのバランスを大切に、性別による役割分担にも疑問を持つ人も少なくありません。少子高齢化が進み、貴重な働き手としてZ世代が今後、社会をどのように変えていくのか、その動向が注目されます。

無縁仏でいい、という選択 墓も、墓じまいも、遺骨もいらない

著者：島田 裕巳



本書は私たちが当たり前と思ってきた供養やお墓の常識に問いを投げかける一冊です。

家族の形や生き方が大きく変化した現代では、先祖代々の墓を守り続けることが必ずしも自然な選択ではなく、むしろ自分らしい最期を考えた結果として無縁仏を選ぶことも、合理的な生き方だと指摘しています。特に共感したのは「亡くなった人のため」というより、「残された人の負担を減らすため」の視点です。お墓の維持費や管理、遠方への墓参りなどは、時に家族の大きな負担となります。この本を読んで、供養とは形ではなく、故人を思う気持ちそのものではないかと考えさせられます。読み終えた後には、不安よりむしろ心が軽くなり、「こういう選択肢もあっていいのだ」と前向きな気持ちになりました。

ルポ過労シニア 「高齢労働者」はなぜ激増したのか

著者：若月 滯子

「定年後はゆっくり暮らしたい」と考える人は少なくありません。しかし現実には生活費や家族の事情などから、定年後も働き続けなければならない人が増えています。「ルポ過労シニア」は、そのような高齢者の働く現場取材し、年齢を重ねても休むことができない人たちの姿を伝えています。体や心の負担だけでなく、年金や介護、孤立など様々な問題が重なりあっている現実が、当事者の声を通して描かれています。「働けること」は大切ですが、「働き続けなければ生活できない」状況は誰もが安心できる社会とは言えません。この本は、高齢者だけの問題ではなく、私たち一人ひとりの将来や、誰もが安心して暮らせる社会の在り方について考えるきっかけを与えてくれます。



「ふつう」ってなんだろう 病気と健康のあいだ

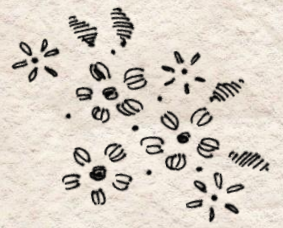
著者：美馬 達哉

「ふつうは、こうでしょ」と言われたことはありませんか？日本社会では情緒的な関係が重視され生きづらさに繋がることがあります。しかし、その「ふつう」がどうやってできたのかを知っておけば、周りに無理に合わせ過ぎなくてもよくなるかもしれません。

例えば感情労働、ピロリ菌、認知証、安楽死など、様々なテーマについて、時には歴史からみた史実に著者が心を動かされながら解説します。この本を読むことで病や障害に限らず、想像力を養い本質を見直して、これからの社会をどう生きぬくのかを、肩の力を抜いて見つめ直すヒントにしてください。



一緒にいいならなぜ分けた



著者：北村 小夜



1950年から86年まで小・中学校で教員(うち21年間、特殊学級担任)であり、＜共に学ぶ＞だけでなく、内申書裁判や伝習館闘争など、自分が疑問に感じたことに対して常に闘ってきた著者が、当時担任として関わりの深かった生徒達の記録と教育現場を通して障害を抱える子どもとその保護者への思いが語られています。

現在では発達障害の診断を受けて特別支援教育を受けることで「こどもに合った教育をする」と早期に決断することが多い中、日本国憲法の「能力に応じて」との文言を受け「分ける」ことを当然にしてしまった教育について、立ち止まり考えさせられる一冊です。



ジェンダー・ジャスティス 社会の無意識が生み出す性と権力の構造

著者：内田 舞



大なり小なり生きていく中で、人が「NO」と言えなくなる瞬間が訪れるのは何故か？

そのメカニズムを解明し「自分が悪い」と思わせられる心理手法や見えない圧力、多数派は気づかない「マイクロアグレッション＝小さな攻撃」等に焦点を当て、自身の経験を通して国民的漫画に描かれるキャラクターへの違和感や近年の芸能人による性加害の問題を取り上げて解説します。

小児精神科医で三児の母である著者はこの本を通して自分の大切にしている価値観や方向性に嘘をつかず自分を信じるインナーコンパスを持って人生の旅路に臨んで欲しいと語りかけています。

